

微地形復原の方法と課題

木 原 克 司

はじめに

先史時代の集落・都城・地方官衙さらに中世城郭などの立地と復原に関する考察は、古くから歴史地理学の主要な研究部門の1つを構成してきたといえる。

ところで、この分野における従来の歴史地理学の方法論は、地籍図による地割の検討、航空写真と諸種の地形図を利用した微地形復原などを基礎とし、これらに文献史料の考察を加えて先に述べた諸遺跡や交通路などを現地地形図上に復原するというものであった。

しかし、考察の基礎となる地割や復原微地形が、対象とする時代のそれを、どの程度反映したものか定かでない場合も多く、そのために考察の結果そのものが、しばしば曖昧なものとなっている。

いうまでもなく歴史地理学は、現在の景観あるいは空間組織と一体となっている歴史的諸要素を取り出し、過去の¹⁾景観あるいは空間組織を再構成するものである。しかし、過去の生活面が深く埋没する沖積平野や、都市化の著しい地域では、歴史的諸要素を完全には取り出し得ず、歴史的文献・古地図および古い地籍図、さらには航空写真を利用して過去の景観あるいは空間組織を再構成しようとする従来の歴史地理学の方法論には、おのずから限界がある。

I 小稿の目的

歴史地理学の理想とするところは、ある地域の過去の歴史的景観や空間組織を時間的同一面で完全な形態で復原し、それらを垂直的に重ね合わせることで、現在の景観や空間組織に到達した過程を明らかにすることであろう。

これは例えていえば、層位的に完全な遺跡で、各時代の生活面を1枚ずつ丹念に剥しつつ、それぞれの時代の景観を復原していくようなものであり、小さな地域ならまだしも、対象とする地域が大きくなるにつれてより困難なものとなってくる。

ところで、先に述べた歴史地理学の理想に近づくために、我々がまず取るべき方法は、原地形をはじめとして、古代以降現代に至る各時代の微地形環境を復原することである。そして、その復原された地形図上に、各時代の歴史的景観あるいは空間組織を復原しなければならない。

このような微地形復原についての試みは、その目的とするところは若干異なるものの、すでにロンドン²⁾において認められる。

それは面積15,000km²・人口820万人を有する大ロンドンの中で、歴史的に古い建築物が多いことから特別区とされているシティ・オブ・ロンドン(面積2.7km²・常住人口数千人)を対象として、文献と考古資料をもとに作製されたローマ期～現代に至る8葉の地図である。これらの地図は、同縮尺のマイラーベースに印刷され、相互に重ね合わせることでによりさまざまな情報を読みとれるようになっている。なかでも特に評価すべきものは、同時代の遺跡の深さを示した遺構等深線図であり、筆者の微地形復原に対する関心を、より強固なものとする契機となったのである。

ところで、ロンドンのように古代より開発の頻度の高い歴史的都市域においては、ともすれば各時代の生活地盤が削平され、発掘調査を通じて得られる地盤高が必ずしも当時のそれを正確に反映したものとは限らないという懸念はあるが、遺構が遺存する限りにおいては、大差な

いものと判断できる。

さて、難波京の立地する上町台地は、その歴史的背景からして先のロンドンに勝るとも劣らず、古くから開発の及んだ地域である。難波京においては、昭和29年以来約27年間にわたる発掘調査が実施され、難波宮の³⁾ 殿舎配置と若干の官衙建物の存在が明らかになってきた。しかし、前期および後期の宮域と京城については、若干の復原が試みられているが未だ明らかでなく、研究は1つの大きな壁に突き当たっているというのが現状である。

その理由として、調査の対象が宮周辺部に移り、民家の建替などの小面積の調査が多く、そのために調査の及ぶ深度も浅くならざるを得ず、各時代の遺構の重複関係を完全には把握し難いこと、さらには、調査データの相互関係が明らかでないことなどがあげられる。

このような現状を打破し、将来への展望を開くためには、27年間に蓄積されたデータをカード化し、さらに、それらを地図上に展開することが必要である。⁴⁾ これは難波京のみならず、近年とみに発掘調査が増加し、古墳群や水田址の

分布が広域的にみられる大阪市東南部の長原・瓜破両地域においても認められる。

これら2つの地域をはじめとして大阪市全域の各時代の微地形環境を復原し、その復原図の上に歴史的景観あるいは空間組織を再構成することが、筆者の究極の目的とするところである。そのためにはまず、微地形復原の第1段階である原地形の復原を行う必要がある。

小稿の目的は、はじめに考古学的な発掘調査や遺跡周辺のボーリングデータより得られた地⁵⁾ 山面高を、地形図上に正確にドットし、それらをもとに原地形の復原を行い、原地形と以後の歴史的景観あるいは空間組織との関連性を把握することにある。

II 地形復原の方法

発掘調査から得られる各種のデータ（地山面の高度や検出遺構）を、正確に地形図上にドットするためには、何らかの基準に基づいたメッシュ図を使用する必要がある。

筆者の場合ベースマップは、国土座標に基づいて作成された大阪市土木局の2,500分の1地

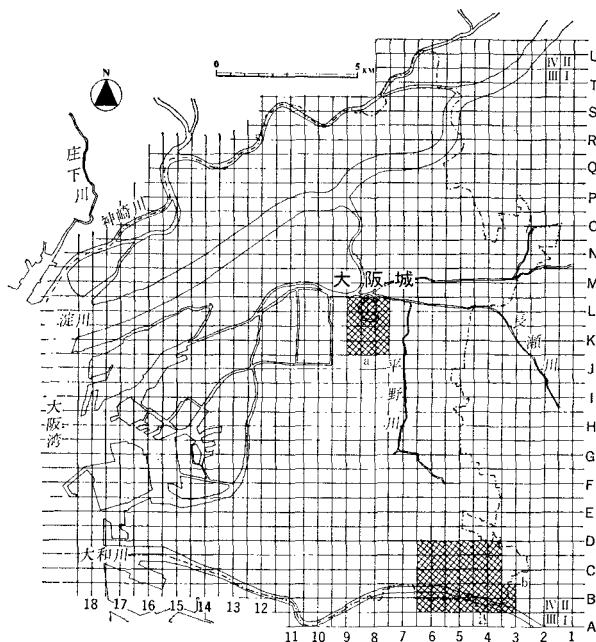


図1 大阪市域全域のメッシュ図 (大地区・中地区)

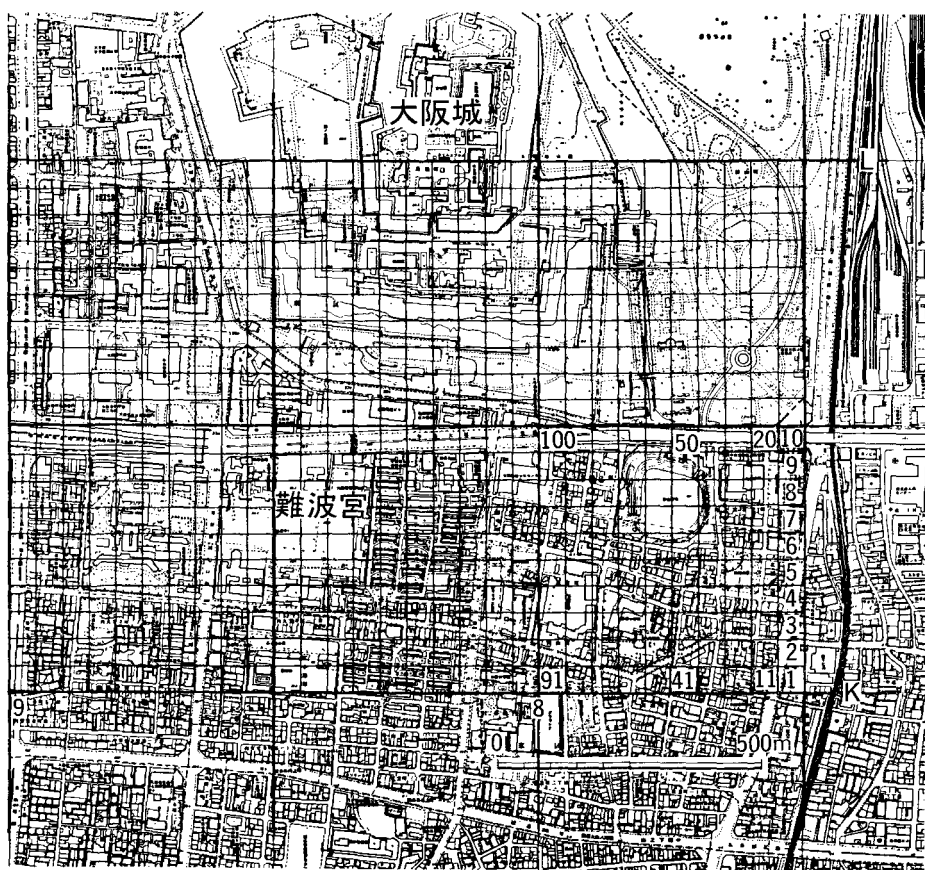


図2 メッシュ図 (小地区)

形図とし、これに大阪市全域をカバーする1 kmメッシュを入れ、東南隅を基点とし北に向ってA～Uのアルファベットを、西に向って1～18の数字を記し、1 km四方を大地区とした。大地区は、メッシュの東南隅の記号の組み合わせで表示した。

次に大地区を、4つの500mメッシュに区分し、図1に示すごとく東南隅より南北方向の平行式でそれぞれI～IV区と定め、中地区とした。さらに、この中地区を100等分し、東南隅の50mメッシュを基点として、南北方向の平行式で(1)～(100)区の小地区に区分した(図2)。

ところで、メッシュの基準を国土座標に求めた理由は、発掘調査における測量基準線が、原則として国土座標に基づいて設定されるところにある。また、大・中・小の3地区に区分し、

それぞれに記号と番号を付したのは、調査データのカード化に有効であるからである。

さて、発掘調査によって得られた地山のデータは、開析谷や傾斜地など自然地形の大きな変化の認められる場合を除いては、50mメッシュ内に1～2点で充分であり、これを2,500分の1地形図上に正確にドットし、標高を示す数値を記入する。ちなみに、調査地点の地山レベルデータの抽出にあたっては、最高点に注意が払われるべきである。なぜなら先に述べたような、大きな地形の変化が認められない地域においては、最高点が最もその地域の原地形に近い値を示すと考えられるからである。さらに、調査時に若干の地山の傾斜が認められた場合、傾斜の方向をあらかじめマークした地点に表示しておく、以後の作業に有効である。

地形図上へのデータプットが終了すると、続いて、各データ間の比例配分による等高線図の作成に入る。等高線図の作成にあたっては、調査地域の微妙な傾斜などを、充分に考慮する必要がある。また、土地条件図・古地図および地籍図などをもとに、対象とする地域の地形的特徴を、あらかじめ把握しておくことも重要である。

ところで等高線の間隔は、微地形復原の対象となる地域の面積の大小・地域の性格、さらには復原の目的に応じて、臨機応変に考えねばならない。

たとえば貝塚のように、貝殻の投棄地点が微妙な地形変化に左右されていることもあり、その場合等高線の間隔は、広域復原に比してかなり小さくする必要がある。

複数の遺跡を含めた広域にわたる微地形復原が、マクロ的復原であるのに対し、先に述べた貝塚など、単数の遺跡の微地形復原は、ミクロ的復原であるといえる。

これらのマクロ・ミクロの2つの復原手法を併用することにより、より大きな地域の微地形復原が可能となろう。またこの方法は、Iの小稿の目的の項で一部ふれたごとく、原地形の復原のみならず、さらに各時代の微地形の復原にも通用しうるものであり、古環境復原の基礎となる微地形復原の、主たる方法といえよう。

さて、筆者は先に述べた方法に基づいて、大阪市域において大小3地域の微地形復原を試みた。以下にその復原結果と、それに基づく若干の景観分析を行う。

Ⅲ 3つのアプローチ

a 上町丘陵北端部の復原(図1のa地域)

この地域は、大阪平野を南北に貫く上町丘陵の北端にあたり、その地理的条件もあって、古墳時代以来今日に至るまで、絶えず開発の中心となってきたところである。

今日までの発掘調査で確認されている遺跡として、5世紀中頃～7世紀前半に至るいわゆる難波宮下層遺跡をはじめ、前・後両期の難波宮

(7世紀中頃～8世紀末)、石山本願寺(15世紀末～16世紀末)、豊臣氏大坂城(16世紀末～17世紀前半)、徳川氏大坂城(17世紀前半以降)がある。

図3は、今日までの難波宮や大阪城を中心とする発掘調査のデータをもとに、この地域の原地形復原を行い、復原図上に前・後両期の難波宮中心部と、徳川氏大坂城の姿をほぼ踏襲する現大阪城を重ねたものである。

ところで、中軸線を同じくする前・後両期の難波宮が、O. P. +22mの等高線内にほぼ宮中心部を収納し得るよう、原地形を巧みに利用して造営されていることは、すでに筆者の指摘したところである。

前期はさておき、宮周辺部における遺構の分布状況からみて、ほぼ方3,600尺(約1km四方)の規模を有していたと考えられる後期難波宮の宮域について、筆者はかつて、東と西についてはO. P. +14m南についてはO. P. +20mを下限とし、地形に則してはシンメトリックに設定されていると指摘した。しかし、現大阪城の位置する宮域北部については、データ不足による原地形復原の不完全さもあって、はたして宮域の北限が、現大阪城の本丸付近にまで広がり得るか否か、明らかではなかった。

ところが、従来上町丘陵の最高所と考えられていた難波宮内裏、朝堂院の位置する地域よりもさらに高い地域(O. P. +26m)が、大阪城二の丸南部に存在することが最近の調査で明らかになった(図3)。

その結果、後期難波宮宮域の北限が、O. P. 15～16m付近に位置し、東と西の限りとはほぼ同じ高度を示すことが明らかとなった。この事実はまさしく、宮域の設定において自然地形が十二分に考慮されたことを示すものといえよう。

また、難波宮下層遺跡の遺物包含層(2次堆積を含む)は、今日までの発掘調査の結果からみても、丘陵上の窪地や周辺部の開析谷〔図3の(イ)・(ロ)・(ハ)〕と考えられる低い地域に分布する傾向がある。このことは、高所から低所へ流されて堆積する土壌の自然的な性質と、

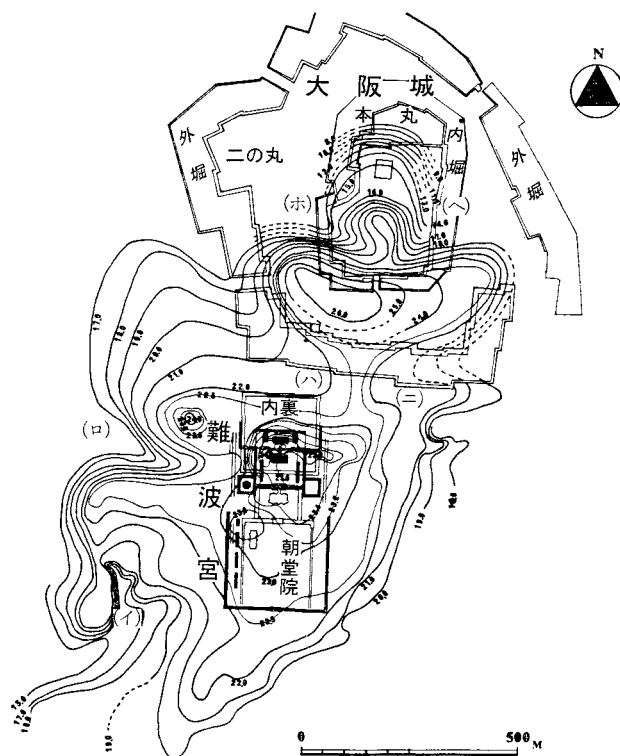


図3 上町丘陵北端部の原地形復原図（等高線の数値はO. P. 値を示す。T. P. = O. P. - 1.3m）

難波宮の造営に伴う、高所の削平と低所の埋め立てに起因するものと考えられるのである。

さて、図3の難波宮内裏の北方に眼を転ずれば、現大阪城南外堀付近の東西に、N約11°Eの方位を示す上町丘陵の稜線を挟んで相対峙する2つの開析谷〔(ハ)と(ニ)〕が、さらに、本丸南部の丘陵突端部の両側に2つの開析谷〔(ホ)と(ヘ)〕が、それぞれ存在することがわかる。

現大阪城二の丸外堀の形状は、元和6年(1620)より寛永6年(1629)にかけて、徳川幕府によって再築された大坂城のそれを、ほぼ踏襲していると考えられている。さらに、現存する各種の豊臣時代大坂城図や、『倭台武鑑』所収の「大坂冬の陣配置図」をもとにした渡辺武¹⁰⁾氏の最近の研究では、先に述べた徳川期大坂城

二の丸が、玉造口を除いて、ほぼ豊臣時代の大坂城二の丸と類似することが指摘されている。

とすれば二の丸外堀は、徳川・豊臣の両時代を通じて、その規模や局所的な形態に相違がみられるものの、ほぼ同位置に構築されたものと推定できる。しかもその位置は、南外堀と西外堀に限れば、図3から読みとれるごとく、丘陵の開析谷をうまく利用して定められているといえる。

この大坂城二の丸の南外堀に関しては、山根¹¹⁾徳太郎、角田栄両氏の研究がある。山根・角田両氏は、二の丸南外堀が古来からの水路を踏襲したものであり、この水路が二の丸外堀の南西隅より、現家庭裁判所・大阪府庁、大阪合同庁舎1号館の西部を経て大川に注ぐものであると推定した。さらに山根氏は、二の丸南外堀の位

置にその存在を想定した東西の河跡を、仁徳天皇の開鑿による難波の堀江とした。

さて、二の丸南外堀がかつての水路であるとする両氏の見解は、図3の原地形から読みとる限り認められないところである。南外堀は先にも述べたように、上町丘陵の稜線より北東あるいは北西の方向に派生した開析谷を利用して開鑿されたものである。この開鑿の時期は、徳川氏大坂城二の丸外堀が豊臣氏大坂城のそれを踏襲したとすれば、豊臣秀吉の大坂築城の頃（16世紀末）と考えられる。

また図3の開析谷（ハ）は、北部地域のデータ不足のため断定はしかねるが、周辺地域におけるこれまでの調査データからすれば、ほぼ西外堀に沿って北上し、現在の東区京橋前之町の西端より大川に至るものと推定される。さらに眼を本丸に転ずると、先に述べたごとく、現天守閣の南に開析谷（ホ）・（ヘ）がみられる。豊臣時代大坂城の本丸の形状を示す史料として、「中井家本丸図」（図4）や「浅野家本丸図」

（図5）がある。この両図において特に注意を引くのは、西側中央付近より本丸内部に大きく入り込む堀が、明瞭に描かれていることである。この特徴は、元和6年（1620）の大坂城再築第1期工事着工に際しての「普請丁場割図」と推定され、豊臣時代大坂城の原形推定に重要な意味をもつものと考えられている毛利家旧蔵の「大坂御城御普請＝付而諸大名衆江地口坪割之¹²⁾図」にも認められる。さらに、1980年に渡辺武氏により発見された、慶長19年（1614）大坂冬の陣における大坂城の構造と東西両軍の配陣の概略を描いた淡彩墨書の絵図である「大坂冬の陣配陣図¹³⁾」においても、本丸外周の堀について同じような特徴が認められる。

この問題の堀の位置は、先の4種の図と図3とを比較したところ、まさしく開析谷（ホ）に合致するものである。さらに本丸東側の堀についても、開析谷（ヘ）との関連が推定できる。

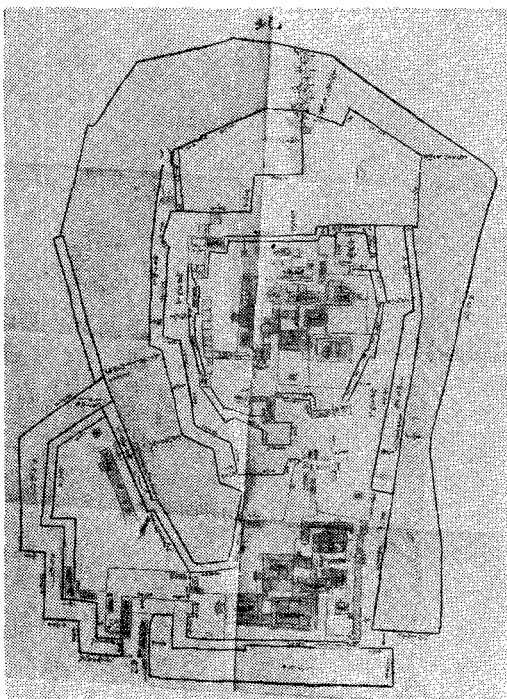


図4 「豊臣時代大坂城本丸図」（東京中井忠重氏蔵）

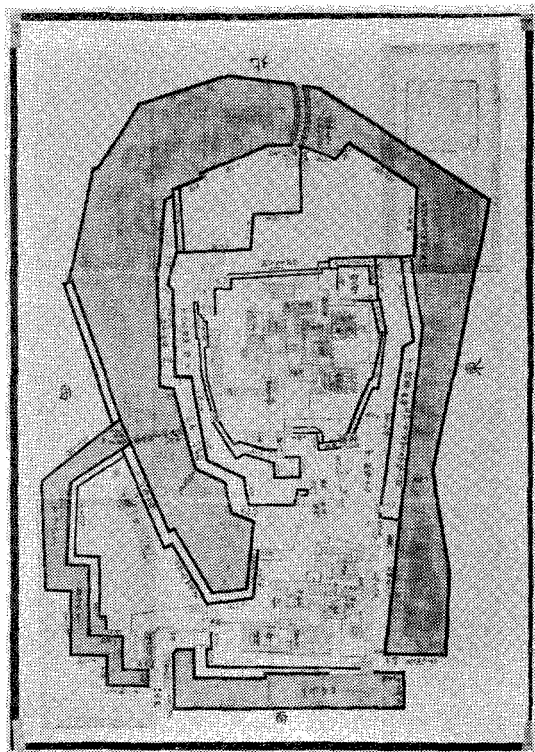


図5 「豊臣時代大坂城本丸図」（『浅野家文庫』の「諸国古城図」所収。広島市立中央図書館蔵）

以上述べてきたように、上町丘陵北部の原地形復原を通じて、7世紀中葉～8世紀末の難波宮や、16世紀末～17世紀前半の豊臣氏大坂城が、上町丘陵の自然地形を巧みに利用して造営されたという事実を明らかにした。

b 森の宮遺跡の復原〔図1のK-7-Ⅲ区および図2の(18)・(19)・(28)・(29)〕

図6は森の宮遺跡第3・4次調査において、各トレンチの断面土層に基づき、貝塚堆積以前の砂質土を主とする縄文時代中期の遺物包含層、およびカキ貝層の上面のレベルを抽出し、それぞれ等高線で表示したものである。この地域では、図6のO. P. +4 mの等高線以東に、沖積性の砂礫層やビート層が厚く堆積するため、原地形復原は西端部の一部に限られる結果となった。

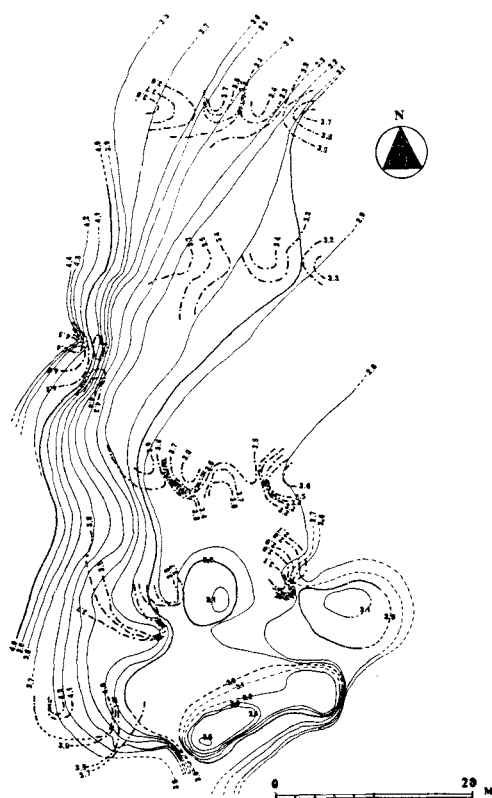


図6 森の宮遺跡の貝塚形成前の地形とカキ貝層の復原（等高線の数値はO. P. 値を示す）

しかし、貝塚形成以前の微地形は、第1・2次調査で海岸線が検出された東部を除けば、ほぼ復原できたといえよう。

また、一点鎖線で示したカキ貝層上面の等高線は、投棄されたカキのマウンドの分布を明瞭に示している。このカキ貝層は、発掘調査の結果、縄文時代後期前半～後半にかけて投棄されたことが明らかになっている。マウンドの分布や、西から東に傾斜する復原微地形からみて、貝塚を造り上げた当時の縄文人の集落が、西の高台に位置することはおのずから予想されるところである。

ところで、西の高台に居住する縄文人が、貝殻を投棄する場合、無秩序に投棄したとは考えられない。貝殻投棄の場は、おそらく時間の推移とともに移動し、その結果大きな貝塚の形成に至ったのであろう。

発掘調査の遺物採集が、このマウンド分布図に従ってなされるとすれば、これは貝塚の形成された順序や、それから類推される縄文人の行動や慣習、さらには集落の人口構成などを考察する上で、重要な資料となろう。

c 長原・瓜破地域の復原（図1のb地域）

この地域では、今日までの発掘調査によって、旧石器時代～室町時代に至る各種の遺物と遺構が検出されてきた。

図7は、これまでの発掘調査によって得られた地山面¹⁶⁾のデータに基づいて、地形図上に原地形復原を行ったものである。この地山面は、必ずしも同時代の生活面を構成するものではないが、これまでの発掘調査の成果を考慮すれば、この復原地形は一応、縄文時代晩期のこの地域の地形環境に近い形態を示すものと考えられるものである。

現大和川を越えて北に突出し、長原・瓜破両遺跡を載せるこの地域の小丘陵は、表層土壌に覆われ、従来河内台地と総称されてきた。しかし図7の原地形復原図をみると、現景観の上で1つに見える河内台地が、埋没した開析谷によって、西より（ア）～（ウ）の3つの小台地に分かれていることが明らかとなる。

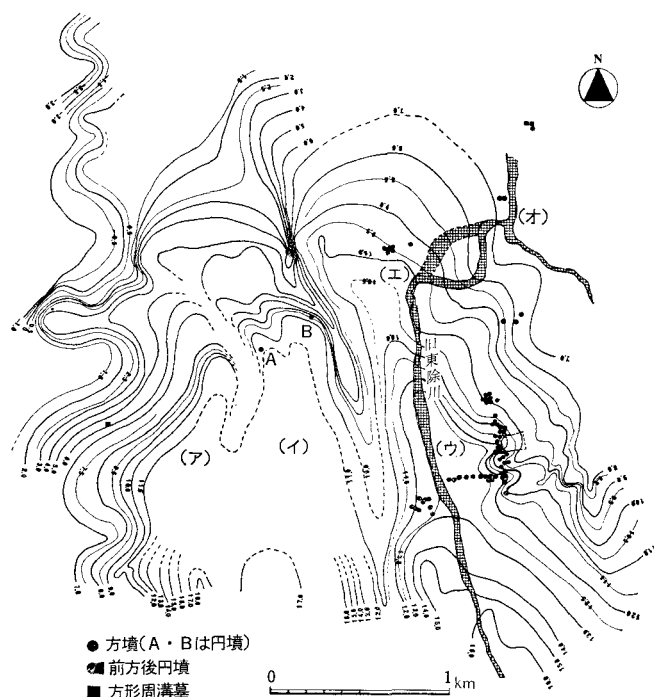


図8 長原・瓜破地域の原地形復原図Ⅱ

図8の中で網をかぶせたものは、航空写真および地籍図から把握した、旧東除川の河道痕跡を示したものである。東除川については、羽曳野丘陵に位置する大乘川や古市大溝などと関連させて、自然・人工をめぐり、かつて議論されてきたところである²⁰⁾。

ところでこの東除川は、現地形図を見る限りにおいて、現大和川以南においては明らかに中位段丘を深く開析し、羽曳野丘陵西斜面に発達した小開析谷の水を集めつつ北流する自然河川であるといえる。

しかし、図8に示した現大和川以北の原地形復原によれば、旧東除川の河道痕跡は明らかに(ウ)台地上を北流しており、なんらの開析地形も認められないことがわかる。この事実は、東除川が現大和川の南(一津屋町付近)で、ある時期に人工的な河道の変更を受けたことを物語るものといえる。

原地形復原が、現大和川以南にまでおよんで

いないため、現段階では断定しかねるが、東除川の本来の河道は、松原市一津屋町付近より北西に向い、図8の(イ)と(ウ)の2つの台地間の開析谷に至ったものと推定される。

また図9は、(ウ)の小台地東部で検出された6世紀後半の水田畦畔と、おそらく水田に伴うものと考えられるほぼ同時代の流路および溝を、原地形復原図上に示したものである。

弥生時代から古墳時代に至る灌漑水利の方法は、登呂遺跡(静岡)をはじめとして、最近の全国的な水田遺構の検出例の増加に伴い、徐々に明らかにされつつある。特に百間川遺跡(岡山)、服部遺跡(滋賀)、北堀池遺跡(三重)、および日高遺跡をはじめとする群馬県下の諸遺跡などの調査成果を通じて指摘し得ることは、条里施行以前の当時の灌漑方法が、自然地形を巧みに利用したものであるということである。すなわち、自然の河川より主水路を人工的に引き、さらに主水路から等高線に沿った樹枝状の

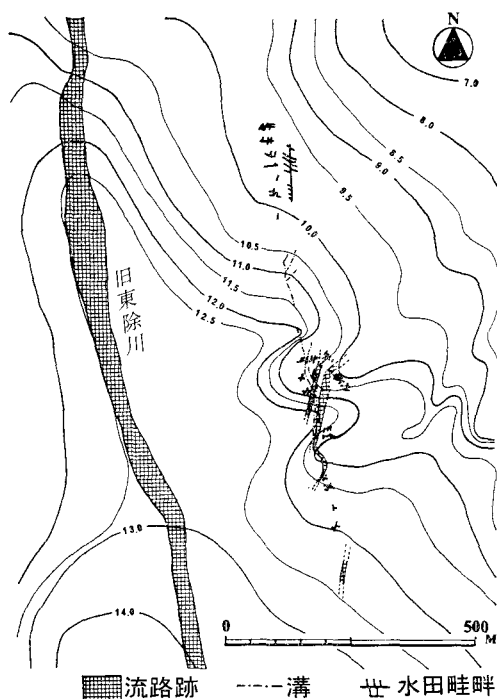


図9 長原遺跡の原地形と古墳時代の水田関係遺構
小溝を穿ち、より低い地域の灌漑を行うという
方法である。

図9に示した3条の流路は、すべて南西から北東への走向を示し、樹枝状にのびる小溝も、ほぼ等高線に沿った形態を呈しているといえる。このことは当然のことながら、台地の高所にこれらの流路および小溝の水源となるべき主水路の存在を窺わせるものである。とすれば、旧東除川がこの小台地(ウ)を中心とする地域の水田灌漑のために穿たれた人工溝渠であり、その開鑿の時期が6世紀後半におよぶとする推定も、妥当性をもつものとなろう。

さらにこれまでの発掘調査を通じて、地山直上に堆積する古墳時代包含層下に、全く砂礫の堆積がみられず、古墳時代包含層の堆積(6世紀後半頃まで)後に大規模な砂礫の堆積が認められるという事実は、先の推定により一層妥当性を与えるものといえよう。

ところで日下雅義氏は、『住吉大社神代記』²²⁾に見られる針魚川を、針魚氏によって新しく掘

削された用水路を指すものと解し、現東除川左岸の西川付近から西に向い、寺池の北に至るルート²³⁾を推定している。しかし、日下雅義氏の推定針魚川による灌漑可能域は、図8の(ア)・(イ)の2台地のみであり、(ウ)の台地は除かれることになる。とすると、これもまた旧東除川を人工溝渠であるとする先の筆者の推定に、妥当性を与えるものといえよう。

今日までの発掘調査を通じて得られた資料から確認し得るこの地域の条里施行年代は、平安時代前期を遡り得ないのが現状であるが、図8の(エ)~(オ)²⁴⁾に至る鉤状に曲折する旧河道は、復原条里の坪界に合致しており、現在の戸池を通る破線で表示した旧ルートが、その付け替えの時期は別として、条里地割に合わせて変更されたことを示すものであることを、最後に付言しておく。

IV 今後の課題

マクロ・ミクロの2つの復原手法の併用による地域(大阪市域)の微地形復原の具体例として、筆者はa~cの3つの事例研究を示した。aとcがマクロ的なものであるのに対して、bはミクロ的手法といえる。また、aとcは今後のデータの増加に伴って、ミクロ化への傾向を示すことはいうまでもない。

ところでa~cの事例は、筆者の意図する微地形復原の第1段階としての原地形復原に他ならない。現実には、原地形は様々な時代の自然、あるいは人工の堆積物によって覆われ、変貌してきたといえる。その傾向は、低湿地域において特に著しい。それゆえに、aとcの事例において筆者の行った考察は、対象とする時代の微地形が原地形と大きく変わるものではないとはいえ、必ずしも当時の正確な微地形復原の上に立ったものではない。復原された原地形は、土壌堆積の地域的な時間の差を考慮すれば、厳密には、相異なる時期の生活面を繋ぎ合わせたものである。とすれば、原地形を基本とした筆者の考察もやや精密さを欠くという批判を免れ得ないところであろう。

しかし先にも述べたごとく、筆者の目的とするところは、縄文時代以降の各時代の微地形復原を行い、その上に立って各々の時代の歴史的景観あるいは空間構造の再構成（復原）を試み、さらにそれらを重ね合わせるにより、時間的経過の中での地表空間の変貌を把握することにある。それゆえに、今後は大阪市域全域の原地形復原を進めつつ、その後の各時代の微地形復原に努め、それぞれの復原図の上に立って、各時代の歴史的景観あるいは空間構造の復原を行わなければならない。これらは今後のデータの増加とあいまって、実現すべき大きな課題であるといえる。

また、縄文時代～古墳時代という比較的古い時期の低湿地域における微地形復原にあたっては、超マクロ的な視野から復原を試みる第四紀分野の見解をも考慮する必要がある。

おわりに

小稿は、考古学の成果を如何にして地理学に活用し、地理学の大きな目標である地域景観の復原に迫るかという、筆者の多年にわたる関心の一端を思いつくまま書きとめたものである。それゆえに残された問題も多く、まとまりのないものになったが、今後それらの課題を解決しつつ、さらに研究を継続発展させていきたく、大方の御批判を賜われれば幸いである。

小稿を草するにあたって、(財)大阪市文化財協会の調査員諸氏より多くの御教示を得た。さらに、大阪城天守閣主任の渡辺武氏からは、図4・図5で使用した大坂城本丸図についての資料を提供していただき、その掲載にあたっては、広島市立中央図書館および中井忠重氏の御好意により許可をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

((財)大阪市文化財協会)

〔注〕

- 1) 谷岡武雄『歴史地理学』古今書院、1979、316～317頁
- 2) Martin Biddle and Daphne M. Hudson with Caorolyn M. Heighway 'The Future of Lon-

don's Past—a survey of the archaeological implications of planning and development in the nation's capital—'

- 3) 難波宮址研究会『難波宮址の研究・第1』1956、『同・第2』1958、『同・第3』1960、難波宮址顕彰会『難波宮址の研究・第4』1961、『同・第5—1』1964、『同・第5—2』1965、『同・第6』1970、(財)大阪市文化財協会『難波宮址の研究・第7』1981
- 4) これらのデータの地図化への試みとして拙稿「難波京城の歴史地理学的考察」『難波宮址の研究・第7』(財)大阪市文化財協会、1981がある。
- 5) ここにいう地山面とは、旧石器時代以後の最深生活面を意味する。現実には、この上面は標高により縄文時代～奈良時代の生活面を形成しており、ところによっては新しい時代の攪乱を受けている。最近の調査では、この面以深で後期旧石器時代に属すると推定される石器が出土している。
- 6) これに対して、地質学などの分野で主として行われているボーリングコアなどを連続させた平野全域におよぶさらに広域の復原は、超マクロの復原といえる。
- 7) 難波宮址研究会『難波宮址の研究・第1』1956、『同・第2』1958、『同・第3』1959、難波宮址顕彰会『難波宮址の研究・第4』1961、『同・第5—1』1964、『同・第5—2』1965、『同・第6』1970、(財)大阪市文化財協会『難波宮址の研究・第7』1981、大阪市教育委員会編『昭和41年～昭和46年度難波宮跡調査報告書』、難波宮址顕彰会『難波宮跡研究調査年報1971』1972、『同・1972』1973、『同・1973』1974、『同・1974』1976、(財)大阪市文化財協会『同1975～1979』1981、大阪城天主閣『大阪城天主閣紀要第3号』1975、『同・第7号別冊』1979、『同・第8号』1980
- 8) 9) 拙稿前掲論文(注4)
- 10) 渡辺武「豊臣時代大坂城の三の丸と惣構について—『倭台武鑑』所収「大阪冬の陣配陣図」を中心に—」『難波宮址の研究第7・論考篇』(財)大阪市文化財協会、1981、139頁、149～150頁
- 11) 山根徳太郎「大阪城の研究」『大阪城の研究・第1』大阪市立大学大阪城址研究会、1953、同「大阪合同庁舎基礎地盤の調査について」『大阪城の研究・第2』大阪市立大学大阪城址研究会、1954、同「仁徳天皇高津宮の研究」『難波宮址の

- 研究・第2』難波宮址研究会，1958，角田栄「大阪合同庁舎の基礎工並びに基礎地盤」『建築と社会』日本建築協会，1954，30～32頁
- 12) 山口県文書館蔵『大阪城天守閣紀要第7号別冊，昭和52年度調査報告特集』大阪城天守閣，1979
- 13) 庄司希光氏蔵『倭台武鑑第10巻』所収
- 14) 『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書』難波宮址顕彰会，1978
- 15) 報告書が未刊行であるためデータを利用することができなかった。
- 16) この地山面とは，旧石器時代を除く主として縄文時代晩期以降の生活面を形成する乳白色シルト層の上面を示す。
- 17) 『土地条件調査報告書（大阪）』建設省国土地理院，1965
- 18) 『長原遺跡発掘調査中間報告1』長原遺跡調査会，1975『同中間報告2』同1975，『長原遺跡発掘調査（資料編）』同1976，『長原』勸大阪文化財センター，1978，『瓜破北遺跡』勸大阪市文化財協会，1980，『亀井・城山』勸大阪文化財センター，1981，『川辺小学校発掘調査略報』勸大阪市文化財協会，1979，『出戸プール発掘調査略報』勸大阪市文化財協会，1979
- 19) 東除川は宝永元年（1704）の大和川付替により平野川に至る現大和川以北の河道が埋立てられ新田となった。現在の東除川は，現大和川以南において残っている。
- 20) 古島敏雄『土地に刻まれた歴史』岩波新書，1967，丸山竜平「河内の開発における二つの画期一溝渠の築造と県・屯倉の成立をめぐる一」『日本史論叢V』日本史論叢会，1975，49～50頁，日下雅義『歴史時代の地形環境』古今書院，1980，283～290頁
- 21) 『登呂』日本考古学協会編，東京堂出版，1978，『岡山県埋蔵文化財報告9』岡山県教育委員会，1979，『月刊文化財181号』文化庁文化財保護部監修，第一法規，1978，『服部遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会，1979，『日高遺跡（I）』高崎市教育委員会，1979，『同（II）』同1980，『芦田貝戸遺跡（II）』同1980，『御布呂遺跡』同1980
- 22) 針魚川については，現東除川の前身をなした小流と解するのと，針魚氏によって新しく掘削された用水路を指すとする2つの考え方がある。
- 23) 日下雅義・前掲書
- 24) 服部昌之「古代の直線国境について」『政治区画の歴史地理・歴史地理学紀要17』歴史地理学会，1975

A Method for the Reconstruction of Micro-topography and Their Problems

Katsushi KIHARA

The purposes of this paper are to propose a method of reconstructing ancient micro-topography and to make a reconstruction of the original topography of three areas of Osaka City. This original topography must constitute the basis for the reconstruction of ancient micro-topography. The author discusses the topographical environments of four sites ; the Naniwa Imperial Palace, Osaka Castle, the Shell Mound of Morinomiya and the Nagahara Archeological Site.

1. The Imperial Domicile (*dairi*) and the Halls of State (*chōdōin*) of Naniwa Imperial Palace were planned with great deliberation and skillfully constructed utilizing topography, with the northern limit of the palace area, which is assumed to be 1 km wide, being situated to the right on the hill.
2. Toyotomi's Osaka Castle, which was built toward the end of the sixteenth century, shows that topography was skillfully utilized in the construction of the donjon and the second citadel (*nino-maru*) of the castle.
3. The so-called Kawachi Plateau may have been divided into three small hills by erosional valleys.
4. The former Higashiyoke River was most likely an artificial ditch dug in order to open paddy fields on small hills in the latter part of the Ancient Burial Mounds period (the latter half of the sixth century).

The author's ultimate objective is to reconstruct the micro-topography of each age, mainly on the basis of archeological achievements and using both macro and micro techniques, and to reconstruct the past landscape of each area, on the basis of reconstructed topographical maps.

Thus the present article constitutes the author's first step in the reconstitution of past landscapes. Therefor it is necessary to reconstruct micro-topography of each age.